

後漢における儒と法 王符と崔寔を手掛かりに

著者	渡部 東一郎
雑誌名	集刊東洋学
巻	78
ページ	23-42
発行年	1997-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/00132521

後漢における儒と法

——王符と崔寔を手掛かりに——

渡部 東一郎

はじめに

後漢中期以降、外戚・宦官の専横や官僚の頹廢等により風俗は壞亂し國家は傾いてゆく。こうした時勢に痛切な批判を加え、政治施策を著した思想家がいる。安帝中期から順帝初期頃その大部分が成立したと思われる王符『潜夫論』、桓帝後期に成立したと思われる崔寔『政論』を繙くと、一方で儒家的な道德・教化を主とする政治が説かれながら、他方ではこれに優先して法家的な法令・賞罰を主とする政治が重視されている。

こうした儒家的主張と法家的主張の混在は、後漢中期から末期における思想家の一つの特徴である。中でも、王符におけるその関係についての研究は数多く、その見解は多様であるが、ともあれ王符や崔寔の主張する法令・賞罰重視の政治が、当時において極めて有効だと考えられていた

ことは確認されよう。

ところで、諸氏の見解においては、当時、儒や法がどのように考えられていたのかについて、ほとんど言及されていない。果たして当時にあつて儒や法はどのように認識されていたのであろうか。王符や崔寔における、法家的政治を儒家的政治に優先させる立場を理解するには、この点を考察する必要があると思われるのである。

現実において、そうした法家的政治が結局実施されなかったにしても、かかる立場は、当時の思想世界においてこれを準備した背景の存在を予想させる。小論では、王符や崔寔の主張を手掛かりに、彼等の立場が現れてくるその思想的背景を検討することにより、当時において儒や法がどのように考えられていたのか、を明らかにしたい。

一 王符・崔寔の「法治」とその論理

本節では、彼等の主張する法家的政治（以下「法治」と称する）とは如何なるものであるのか、またこれを儒家的政治に優先させる論理とは何であるのか、を考察してみる。先ず王符「潜夫論」から検討することにした。王符は、衰制篇において、三皇・五帝より亡国に至るまで、位次を設け、それぞれの治世を次のように述べる。

無憲制而成天下者三皇也。画則象而化四表者五帝也。明法禁而和海内者三王也。行賞罰而齊万民者治國也。君立法而下不行者乱國也。臣作政而君不制者亡國也。

現状を「衰世」（務本篇）と見做す彼は、「先ず治國を致し、然る後三王の政乃ち施すべきなり。道三王に齊しくして、然る後五帝の化乃ち行なふべきなり。道五帝に齊しくして、然る後三皇の道乃ち従ふべきなり」（衰制篇）と、先ず「賞罰」を実施し万民を整齊する「治國」を実現することにより、漸次、三王・五帝・三皇の治世と同様の状態に至り得るとする。

では、その賞罰実施の基準となるべき「法」について、彼はどのように考えているのであろうか。断訟篇に、

五代不同礼、三家不同教、非其苟相反也、蓋世推移而俗化異也。俗化異則乱原殊、故三家撫世、皆革定法。

とあるように、世が移れば世俗も異なるのだから、「法」はその時々無秩序の原因に応じて設けるべきものとされる。そして、「法」の目的については、

夫立法之大要、必令善人勸其德而樂其政、邪人痛其禍而悔其行。
（断訟篇）

凡立法者、非以司民短而誅過誤、乃以防姦惡而救禍敗、
檢淫邪而内正道爾。
（徳化篇）

といわれ、善人に徳行を行なわせ、悪人に過ちを悔いさせると同時に、あるべき道に人々を導くことだとされる。

このことは、「夫れ天道は善を賞して淫を刑す。天の工人其れ之に代はる。故に凡そ王者を立つるは、將に邪惡を誅して正善を養ふを以てなり」（述赦篇）とあるように、天に代わって王者がなすべきこと、天道に依拠した行為とされることにも注意すべきであらう。かくして君主は、天道の代行として善を養い惡を除くべく「法」の施行に務めなければならぬのである。

では、「法」を施行する際、君主はどういったあり方で臨まなければならないのであろうか。衰制篇に、

民之所以不乱者上有吏。吏之所以無姦者官有法。法之所以順行者國有君也。君之所以位尊者身有義也。

とあるように、君主は身に「義」を保ち「法」を順行させることにより、官僚がその職を全うし人民が乱れないよう

にしなければならない、とされる。そして、君臣關係については、明忠篇に、

夫明掘下起、忠依上成。……要在於明操法術、自握權秉而已矣。

とあり、君主自身が「法術」を駆使し「權秉」を掌握しなければならぬ、とされる。「法術」とは「下をして欺くを得ざらしむる」ものであり、「權秉」とは「勢をして乱るを得ざらしむる」ものであるという（明忠篇）が、その際、より重要であるのは「法術」である。すなわち、

凡為人上、法術明而賞罰必者、雖無言語而勢自治。治勢一成、君自不能乱也、況臣下乎。法術不明而賞罰必者、雖日号令、然勢自乱。乱勢一成、君自不能治也、況臣下乎。是故勢治者、雖委之不乱。勢乱者、雖慙之不治也。（明忠篇）

と、君主が法術を駆使して賞罰を厳正に行なえば、「勢」は自然に治まるのだとされる。かくして「治勢」が一度成就すれば、「臣下は其の言を敬して其の禁を奉じ、其の心を竭くして其の職に称ふ」（明忠篇）とあるように、臣下は忠実に職務を全うするとされるのである。

さて、王符の描く「法治」のあり方は、本政篇冒頭に述べられている。

凡人君之治、莫大於和陰陽。陰陽者以天為本。天心順

則陰陽和、天心逆則陰陽乖。天以民為心。民安樂則天心順、民愁苦則天心逆。民以君為統。君政善則民和治、君政惡則民冤乱。君以得臣為本。臣忠良則君政善、臣姦枉則君政惡。□□以選為本。選舉実則忠賢進、選虛偽則邪党貢。選以法令為本。法令正則選舉実、法令詐則選虚偽。法以君為主。君信法則法順行、君欺法則法委棄。

これによれば、政治において最も重要なのは陰陽を調和させることであるが、そのためには、先ず君主が「法」を疑うことなく施行しなければならない。「法」が適正に施行されれば忠実・善良な官僚が登用される。そうした官僚が登用されれば君主の政治は善なるものとなる。政治が善なるものであれば人民は安らぎ治まる。かくして人民が治まれば天は和らぎ、陰陽は調和するのである。

王符の現状認識を見てみると、浮侈篇に「凡そ諸の譏る所は、皆民の性にして競ひ務むる者に非ず、乱政・薄化、之を然らしむるなり」とあり、当世奢侈の風俗は民の本性からのものでなく「乱政・薄化」に起因するとされるように、王符の批判は概ね民に向けられたものではない。述赦篇で大赦の頒発に関して直接皇帝を批判する例もあるが、多くは官吏登用における名実不一致と、それに起因する官僚の腐敗に対するものようである。従って、当時にあつて彼

が甚だ憂えたことは、忠実・善良な官僚が登用されず、悪政が行なわれて人民が苦しむ結果、陰陽が調和されないことであつたと思われる。

では、かかる状況を招来した原因を王符はどのように考へていたのであるうか。三式篇において、彼は当時の状況を次のように記述している。

今者刺史・守相、率多怠慢、違背法律、廢忽詔令、專情務利、不卹公事。細民冤結、無所控告。下土辺遠、能詣闕者、万無数人。其得省治、不能百一。郡県負其如此也、故至敢延期、民日往上書。

続けて「此れ皆太寛の致す所なり」というが、王符は右の引用に先立ち次のような仲尼の言を掲げている。

昔仲尼有言、政寛則民慢、慢則糾之以猛、猛則民残、殘則施之以寛、寛以済猛、猛以済寛、政是以和。

この言によれば、「猛」政により残なわれた風俗を救済すべく施されたはずの「寛」政の行き過ぎ、すなわち「太寛」なる政治がかかる状況をもたらした原因だと王符は見做していることになる。そして、後文で次のようにいう。

夫積怠之俗、賞不隆則善不勸、罰不重則惡不懲。故凡欲變風改俗者、其行賞罰也、必使足驚心破胆、民乃易視。

王符は、「太寛」なる政治が招いた現状を、仲尼の言に「糾

之以猛」「猛以済寛」とある立場に依拠して「猛」政、すなわち「法治」によって救済すべく主張していると考えられるのである。

確かに王符は「法令・刑賞は、乃ち民事を治めて整理を致す所以のみ、未だ以て大化を興し太平に升すに足らざるなり」(本訓篇)といい、「法令・刑賞」は太平に至り得る方法ではなく「民事」を治めるものに過ぎないとする。そして「人君の治は、道より大なる莫く、徳より盛んなる莫く、教より美なる莫く、化より神なる莫し」(徳化篇)といい、政治においては儒家的な道德教化によることが最上であるとす。しかし、

黔首之属、……遭良吏則皆懷忠信而履仁厚、遇惡吏則皆懷姦邪而行淺薄。忠厚積則致太平、姦薄積則致危亡。

(徳化篇)

ということからすると、太平を招来すべく人民を善に導くためには必ず良吏を登用しなければならないのであるから、先ず姦惡・怠慢な「惡吏」を排除することが必要になる。三式篇において、賞罰を重視し官僚を厳しく監督した前漢宣帝の治績を掲げて、王符は、

由此觀之、牧守大臣者、誠盛衰之本原也、不可不選擇也。法令賞罰者、誠治乱之枢機也、不可不嚴行也。

という。王符の主張する「法治」とは、人民を阻害する類

廃した官僚を排除することを目論んだものに他ならないと思われるのである。

次に崔寔「政論」について見てみよう。⁽³⁾ 崔寔は如何なる認識から「法治」を主張するのであろうか。彼の現状認識から見てゆこう。崔寔によれば、

自漢興以来、三百五十余歳矣。政令垢駢、上下怠懈、風俗彫敝、人庶巧偽、百姓鬻然、咸復思中興之救矣。

〔後漢書〕卷五十二、崔駰列伝附崔寔伝引「政論」と、建国以来三百五十余年を経て、王朝は政治が滞り風俗は凋落した状態であつた。当時のより具体的な状況について、崔寔は「頃者法度は頗る古を稽へず、而も旧号は網に吞舟を漏らす。故に庸夫は藻稅の飾を設け、匹豎は方丈の饌を享け、下は其の上を僭し、尊卑別無し」と法度の弛緩を批判し、「天下之患」として（一）人民の奢侈、（二）經濟の破綻、（三）社会秩序の紊乱・風俗の壊敗（『群書治要』卷四十五）を指摘する。すなわち、

（一）今使列肆充侈功、商賈鬻僭服、百工作淫器。民見可欲、不能不買。買人之列、戸踏踰侈矣。故王政一傾、普天率土、莫不奢侈者。非家至人告、乃時勢驅之使然。此則天下之患一也。

（二）且世奢服僭、則無用之器貴、本務之業賤矣。農桑勤而利薄、工商逸而入厚。故農夫輟耒而彫鏤、工女

投杼而刺文。躬耕者少、末作者衆。生土雖皆墾、故地功不致。苟無力穡、焉得有年。財蓄蓄而不尽出、百姓窮匱而為姦寇。是以倉廩空而囹圄實。……斯則天下之患二也。

（三）……乃送終之家、亦無法度。……天下敗慕、恥不相逮、念親將終、無以奉遣。乃約其供養、予修亡沒之備。老親之飢寒、以事淫汰之華稱。竭家尽業、甘心而不恨、窮阨既迫、起為盜賊、拘執陷罪、為世大戮。……今之臣妾、皆余黃甘而厭文繡者、蓋以万數矣。……今豪民之墳、已千坊矣。欲民不匱、誠亦難矣。是以天慙慙、人以汲汲、外溺奢風、內憂窮竭。故在位者則犯王法以聚斂、愚民則冒罪戮以為健。俗之壊敗、乃至於斯。此天下之患三也。

と。奢侈に赴くことにより、本業である農耕・養蚕を棄て無用のものを作る者が多くなる。農耕・養蚕に務めるものが少なくなれば、結果として窮乏する人々が現れて罪を犯さざるを得なくなる。にも拘わらず、人々は奢侈に赴き、そのためには、官僚さえ法を犯して人民から収斂し、人民もまた法を憚らずに罪を犯す、というのである。

（一）において「乃時勢驅之使然」というように、人民が奢侈に赴くのは時勢によるもので、人民そのものに原因があるとは考えられていない。では、奢侈のために憚らず罪

を犯す風俗を形成した原因は何にあると考えるのであろうか。

今官之接民、甚多違理。……是以風移於詐、俗易於欺。

獄訟繁多、民好殘偽。為政如此、未覩其利。斯皆起於

典藏之吏、不明為國之体。〔群書治要〕卷四十五

これによれば、そうした風俗を形成した責任は官僚にあることになる。当時の官僚の頽廢については、

今典州郡者、自違詔書、縱意出入。每詔書所欲禁絕、雖

重懇側、罵詈極筆、由復廢舍、終無悛意。

〔全後漢文〕卷四十六

ともいわれ、詔書に違ひ自身の意のままに行動するほどであつた。彼にとつては、こうした官僚の頽廢こそが大いに憂うべきことであつたに違ひない。また崔寔は、君主が下す大赦についても批判を加える。本来、大赦とは「聖王受命して興り、乱を討ち残を除き、其の鯨鯢を誅するや、其の臣民を赦し、漸く染化す」ものである。しかし、

頃間以来、歲且壹赦、百姓忸怩、輕為奸非。每迫春節、

微倖之会、犯惡尤多。近前年一期之中、大小四赦。……

況不軌之民、孰不肆意。遂以赦為常俗。

〔群書治要〕卷四十五

とあるように、近年の度重なる大赦の發布こそが、それを頼みとして人民が軽々しく罪を犯す、犯罪増加の温床と

なっているという。

天下の乱れる理由について、崔寔は「常に人主平を承くること日に久しく、俗漸く敝るるも悟らず、政浸く衰ふるも改めず、乱に習れ危に安んじ、佚として自ら覩ざるによる」〔後漢書〕卷五十二」と、君主が時勢を顧みず政治を改めないからであるとする。では、現状を招来した時勢を顧みない政治とは一体如何なるものであるのだろうか。崔寔は、

量力度德、春秋之義。……自非上德、蔽之則理、寬之則乱。

〔後漢書〕卷五十二

といい、続けて、「嚴刑峻法」を用いた宣帝の政治を賞賛する一方、「寬政」を行なつた元帝は「漢室基禍之主」となつたとし、「政道の得失、斯に於いて監るべし」という。これによれば、当時の政治は「寬之則乱」とされる「寬」政であつたと思われる。

且濟時拯世之術、豈必体堯蹈舜、然後乃理哉。期於補綻決壞、枝柱邪傾、隨形裁割、要措斯世於安寧之域而已。故聖人執權、遭時定制、步驟之差、各有云設。

今既不能純法八代、故宜參以霸政。則宜重賞深罰以御之、明著法術以檢之。〔後漢書〕卷五十二

ここで「豈必体堯蹈舜、然後乃理哉」「今既不能純法八代」といい、時宜に適つた、霸政を交えた政治を行うべく主張

することからすると、当時の「寛」政とは堯・舜等に範をとろうとするものであつたらしい。しかし、後に述べるように、当時の「寛」政は名ばかりの実質の伴わないものであつたようである。

さて、時宜に適った、霸政を交えた政治とは、「嚴之則理」という法令・賞罰を重視した「法治」であること言うまでもない。前漢文帝による肉刑の廃止についても、

文帝雖除肉刑、当創者答三百、当斬左趾者答五百、当斬右趾者弃市。右趾者既殞其命、答撻者往往至死、雖有輕刑之名、其実殺也。当此之時、民皆思復肉刑。

と、実は死罪と同一であつたとし、「文帝は乃ち刑を重くす、之を軽くするに非ざるなり、嚴を以て平を致す、寛を以て平を致すに非ざるなり」と評する（『後漢書』卷五十二）。彼によれば、文帝のこの措置も時宜に適った施策だと考えられているのであろう。

しかし、崔寔は、無論儒家的な道德・教化を否定するわけではない。彼は、国を治める方法を身体を理める方法に喩えて「夫れ刑罰は乱を治むるの藥石なり、徳教は平を興こすの梁肉なり。夫れ徳教を以て残を除くは、是れ梁肉を以て疾を理むるなり、刑罰を以て平を理むるは、是れ藥石を以て養に供するなり」（『後漢書』卷五十二）といい、乱れた世には刑罰を主としてこれを治め、平穩な世には徳教

を主としてこれを興すのだとする。こうした態度は次の資料からも確認されよう。文帝の肉刑廃止について述べた後、
必欲行若言、当大定其本、使人主師五帝而式三王。盪亡秦之俗、遵先聖之風、弃苟全之政、蹈稽古之蹤、復五等之爵、立井田之制。然後選稷・契為佐、伊・呂為輔、樂作而鳳皇儀、擊石而百獸舞。

（『後漢書』卷五十二）
という。ここでは人主に「師五帝而式三王」らせること、また「五等之爵」「井田之制」を再び実施し、その後、稷・契、伊尹・呂尚のような賢哲の補佐を用いるべきことがいわれる。当時の堯・舜等に範をとろうとする「寛」政は、聖王の制度を整えていない、実質の伴わないものと捉えられているのである。時宜に適った「法治」を行ない、制度を整えてこそ始めて、徳教による統治が実現すると崔寔は考えていたのだと思われる。「天下之患」を掲げた後、彼は次のようにいう。

承三患之敝、繼荒頓之緒、而徒欲修故而無匡改、雖唐・虞復存、無益於治乱也。昔聖王遠慮深思、患民情之難防、憂奢淫之害政、乃塞其源以絕其末、深其刑而重其罰。夫善理川者必杜其源、善防姦者必絕其萌。

（『群書治要』卷四十五）
現状においては、従来の政治、すなわち虚しく古に範をと

ろうとする「寛」政を改めないならば、たとい堯・舜が存在したとしても乱を治めることは出来ない。先ず法令・賞罰による乱世の救済が緊要だ、と崔寔は考えていたのである。崔寔の「法治」とは、徳教による政治を実施し得る「平」世を招来すべきことを目論んだものであり、こうした姿勢は王符と軌を一にするものであろう。

ところで、王符と崔寔に共通してみられる論理として興味深いのは、王符が三式篇において引用していた仲尼の言と、崔寔が「自非上徳、蔽之則理、寛之則乱」ということとである。この論理は果たして何に基づくものなのであろうか。

『春秋左氏伝』昭公二十年に次のような記事がある。鄭の子産は病の床に就くと、子大叔に次のように遺言した。

我死、子必為政。唯有徳者、能以寛服民。其次莫如猛。夫火烈、民望而畏之、故鮮死焉。水懦弱、民狎而翫之、則多死焉。故寛難。

その後数ヶ月で子産は死去し、その言のごとく子大叔が執政したが、彼は「猛」政ではなく「寛」政を施した。すると、国内では盗賊が増加し荏苒汜において盗みを行なうようになった。子大叔は子産の言に従わなかったことを悔い、これを攻めて尽滅した結果、盗賊が減少した、という。『左氏伝』は続けて仲尼の評語を載せる。

仲尼曰、善哉。政寛則民慢、慢則糾之以猛。猛則民殘、殘則施之以寛。寛以濟猛、猛以濟寛、政是以和。

王符の引用はこの仲尼の評語ほぼそのままであり、崔寔の語は先の子産の遺言を踏まえたものである。とするならば、彼等の法治の主張はこの『左氏伝』の記事と深く関係するものではあるまいか。

『左氏伝』の記事において、子産の遺言には「唯有徳者、能以寛服民。其次莫如猛」とあり、「寛」と「猛」には「徳」を基準とした位次が設けられている。一方、仲尼の評語には「寛以濟猛、猛以濟寛、政是以和」とあり、「寛」と「猛」とが相互に補完することによって政治が調和するとされている。従つて、蔽密には両者の考えは同一ではない。崔寔の主張は前者に依拠すると思われるわけだが、これは、彼が時宜に適わぬ実状を厳しく捉え、法治実施の必要性を、王符以上に実感していたことを物語るものであろう。しかし、先に見たように、崔寔の憂える現状を招いたものが「寛」政であるならば、彼の立場も王符同様、「寛」政の生じた弊害を「猛」政によつて救済するものだと考えられる。

以上のことからすると、王符や崔寔の「法治」を主張する立場は、この『左氏伝』の所謂「寛猛相濟」という論理により正当化されているのではないか、と考えられる。この論理に依拠して、彼等は現状を「寛」政の生じた弊害と

見做し、これを「猛」政、すなわち「法治」によつて救済すべきだと主張するのである。

ところで、『後漢書』所収の上奏文等を調べてみると、この「寛猛相濟」に依拠すると思われる発言が幾つか見られる。王符や崔寔において、その「寛猛相濟」に依拠する主張が見られることは、これらと関係するものではなからうか。そこで次には、視点を交え、「寛猛相濟」に依拠すると見られる発言を、政治の展開を視野に入れて考察してゆくこととしたい。

二 後漢時代の政治の展開と「寛猛相濟」（一）

——後漢初期、光武帝から章帝まで——

光武帝・明帝の政治は、「吏事」を主としたもの（以下、「吏治」と称する）といわれる。『後漢書』⁷（以下、省略する）巻七十六、循吏列伝序に、「建武・永平の間、吏事刻深にして、亟々諛言卑辞を以て、守長を転易す」とあるように、吏治とは法を奉じる文吏的官僚を駆使するものである。そして、その徹底には流言飛語等により度々官僚を転任させるといった一面があったらしい。こうした面は、例えば、巻二十九、申屠剛伝に「時に内外の群官は、多く（光武）帝自ら選挙す。加ふるに法理を以て厳察し、職事過だ苦し。尚

書近臣、乃ち前に捶撲牽曳せらるるに至る。群臣敢へて正言する莫し」、また巻四十一、鍾離意伝に「（明）帝は性偏察、好く耳目の隠発するを以て明と為す。故に公卿大臣数々詆毀せられ、近臣尚書以下提拽せらるるに至る」とあるように、内外の群官全てに及んでおり、鞭打たれ引きずられる等、極めて厳しいものであった。

こうした深刻な吏治に対しては批判が提出されている。例えば、上疏において、朱浮が「陛下は使者を以て腹心と為し、使者は従事を以て耳目と為す。是れ尚書の平、百石の吏に決せらる。故に群下は苛刻にして、各々自ら能と為す」（巻二十三、朱浮伝）といい、鍾離意が「群臣、化を宣べ職を理むる能はず、而も苛刻を以て俗と為す。吏の良人を殺すこと、踵を繼ぎて絶えず」（巻四十一、鍾離意伝）というように、官僚は「苛刻」であることを「能」となし、また、それが「俗」となり、良民をも殺害するに至るとされるほど、吏治の厳しさは官僚自身の政治にも深く影響していたようである。

次いで即位した章帝は「少くして寛容、儒術を好む」（巻三、肅宗孝章帝紀）といわれ、その政治は「寛厚」（同右 論）であったと評される。范曄の論では、その「寛厚」な政治の一例として「陳寵の義に感じ、慘獄の科を除く」というが、その陳寵の上疏に「寛猛相濟」に依拠すると思われる

主張が見られる。

卷四十六、陳寵伝によれば、章帝初期、尚書となつた陳寵は、永平の故事を承けた厳しい吏政や尚書の重い決裁を見、前世の苛酷な風俗を改めるべきだと考え、次のような上疏をしている。

臣聞、先王之政、賞不僭、刑不濫、与其不得已、寧僭不濫。……聖賢之政、以刑罰為首。往者斷獄蔽明、所以威懲姦慝。姦慝既平、必宜濟之以寬。陛下即位、率由此義、數詔群僚、弘崇晏晏。而有司執事、未悉奉承、典刑用法、猶尚深刻。斷獄者急於笮酷酷烈之痛、執憲者煩於詆欺放濫之文。或因公行私、逞縱威福。……方今聖德充塞、侑于上下、宜隆先王之道、蕩滌煩苛之法。輕薄箠楚、以濟群生、全広至德、以奉天心。

この上疏を承け、章帝は事ごとに「寛厚」に務め、後有司に詔を下して「慘酷之科」等を除いた、という。

ここで先ず注目すべきは「往者斷獄蔽明、所以威懲姦慝。姦慝既平、必宜濟之以寬」との主張である。これが「寛猛相濟」に依拠するものとする、「猛」政が生じた弊害を、「施之以寛」「寛以濟猛」という立場から、「寛」政により救済すべきだということになる。「永平故事」「往者斷獄蔽明」というから、その弊害とは、明帝永平十三年（七〇）の楚王英謀反事件に代表される諸王謀反に起因するものとも思

われるが、先に見た光武・明帝期の吏治を考え併せてみると、彼の批判する章帝初期の官僚のあり方には二帝の吏治の影響が大きかったものと思われる。この点は、やはり同時期のものと思われる第五倫の上疏に「光武は王莽の余を承け、頗る嚴猛を以て政を為す。後代之に因り、遂に風化を成す」（卷四十一、第五倫伝）とあることから確認されよう。すなわち、陳寵は光武・明帝期の吏治を「猛」政と見做し、それが生み出した苛酷な風俗を救済するために、「煩苛之法」を除き「寛」政を施すべく主張しているのである。

次に注目すべきは「陛下即位、率由此義、數詔群僚」との主張である。「此義」とは「濟之以寛」を指すものと思われる。陳寵の認識によれば、所謂「寛猛相濟」に依拠する「濟之以寛」という「義」に従い、章帝自身が詔を下していることになる。

ここで想起されるのは、章帝が「左氏伝」に深く関心を寄せ尊重していることである。「特に古文尚書・左氏伝を好む」（卷三十六、賈逵伝）とされる章帝は、建初元年（七六）、賈逵に命じ「公羊伝」「穀梁伝」に優る「左氏伝」の大義を条奏させ、更に、公羊学の嚴・顔二氏を学ぶ諸生中から才能ある二十人を選抜させ「左氏伝」を教授させている（同右）。そして、建初八年（八三）には、詔を下して、才能あ

る者を群儒に選拔させ、『左氏伝』『穀梁伝』『古文尚書』『毛詩』を授業させてもいる（巻三、肅宗孝章帝紀）。また、建初四年（七九）開催の白虎觀會議において、章帝は「親ら制を称して臨決」（同右）したが、その記録『白虎通義』の内容は、表面『公羊伝』を標榜しながら、内実は『左氏伝』の立場に接近したものとされる¹¹。

章帝は『左氏伝』に説かれた「寛猛相濟」という論理に依拠し、光武帝以来の吏治が生じた弊害を救済すべく「寛」政を行なったものと思われるのである。

しかし、章帝は「寛」政のみを行なったわけではなく、光武帝以来の吏治をも踏襲しているようである。章帝即位直後、永平十八年（七五）、冬十一月甲辰に起こった日食の災異に対する馬嚴の封事にも「寛猛相濟」に依拠すると思われる言辞が見られる。

臣聞、日者衆陽之長、食者陰侵之徵。書曰、無曠庶官、天工、人其代之。言王者代天官人也。故考績黜陟、以明褒貶。無功不黜、則陰盛陵陽。臣伏見、方今刺史太守專州典郡、不務奉事尽心為國、而司察偏阿、取与自己、同則舉為尤異、異則中以刑法、不即垂頭塞耳、採求財賂。今益州刺史朱輔・楊州刺史倪說・涼州刺史尹業等、每行考事、輒有物故。又選舉不実、曾無貶坐。是使臣下得作威福也。……宜勅正百司、各責以事、州郡

所舉、必得其人。若不如言、裁以法令。伝曰、上德以寬服民、其次莫如猛、故火烈則人望而畏之、水懦則人狎而翫之、為政者寛以濟猛、猛以濟寛。如此、綏御有体、災眚消矣。

（巻二十四、馬援伝附馬嚴伝）
馬嚴は「伝曰」として「寛猛相濟」を為政者の政治のあり方として提示している。彼の批判は刺史・太守の腐敗、特に刺史の不法行為、選挙の名実不一致に向けられている。また『尚書』咎繇謨の一節を根拠に「故考績黜陟、以明褒貶」といい、更に「若不如言、裁以法令」ということからすると、その趣旨は「猛以濟寛」にあると思われる。そして、彼の主張に従い、章帝は刺史朱輔等を罷免しているのである。同様の事例は、先にも掲げた第五倫の上疏においても見られる。巻四十一、第五倫伝には、

陛下即位、躬天然之德、体晏晏之姿、以寛弘臨下、出入四年、前歲誅刺史二千石貪殘者六人。……其刺史・太守以下、排除京師及道出洛陽者、宜皆召見、可因博問四方、兼以觀察其人。諸上書言事有不合者、可但報歸田里、不宜過加喜怒、以明在寛。

とあり、章帝を「寛弘」であるとしながらも、前年に貪欲・殘酷な官僚六人を誅殺・処罰したことを暗に批判し、より「寛」政を施すべく第五倫は主張する。これらからすると、章帝には「猛以濟寛」という立場から「猛」政、すなわち

吏治を行なう一面があったと考えられる。

しかし、ここで注意すべきは、光武帝・明帝による吏治と章帝によるそれとは質的に相違するものだというところである。すなわち、前者は、官僚に対して厳しい監督を加え、根柢のない譏りを受けただけで罷免・処罰するものであるのに対して、後者は不法行為・貪欲・残酷といった官僚の腐敗に対処するものである。かかる官僚の腐敗の有様は、章帝の詔にも度々触れられている。卷三、肅宗孝章帝紀によれば、

有司明慎選舉、進柔良、退貪猾、順時令、理冤獄。

（建初元年（七六）正月丙寅）

選舉乖戾、俗吏傷人、官職耗乱、刑罰不中、可不憂与。……今刺史守相、不明真偽、茂才孝廉、歲以百數、既非能顯、而当授之政事、甚無謂也。

（建初元年（七六）三月甲寅）

而今貴戚近親、奢縱無度、嫁娶送終、尤為僭侈。有司廢典、莫肯舉察。……今自三公、並宜明糾非法、宣振威風。

（建初二年（七七）三月辛丑）

孔子曰、刑罰不中、則人無所措手足。今吏多不良、擅行喜怒、或案不以罪、迫脅無辜、致令自殺者、一歲且多於斷獄、甚非為人父母之意也。有司其議糾舉之。

（建初五年（八〇）三月甲寅）

間勅二千石各尚寬明、而今富姦行賂於下、貪吏枉法於上、使有罪不論而無過被刑、甚大逆也。夫以苛為察、以刻為明、以輕為德、以重為威。四者或興、則下有怨心。吾詔書數下、冠蓋接道、而吏不加理……。

（元和二年（八五）正月乙酉）

とある。章帝は選舉を公正に行なうことによって「柔良」を登用し「貪猾」を退けるようにいう。それにも拘わらず、選舉は名が実に伴わず、官僚は貴戚・近親の僭侈を取り締まることなく、賄賂により法令を曲げ、有罪を許し無実を罰するのである。こうした状況を糾正するために章帝は吏治を行ない、腐敗した官僚を排除したのである。¹³

以上の考察からすると、章帝の政治は「左氏伝」の所謂「寬猛相濟」という論理と密接な関わりを持っているようである。すなわち、「左氏伝」に深く関心を寄せ尊重した章帝は、一方で、光武・明帝期の吏治が生じた弊害を救済すべく「寬以濟猛」という立場から「寬」政を施し、同時に、腐敗した官僚を排除すべく「猛以濟寬」という立場から「猛」政（吏治）を行なったものと考えられるのである。

三 後漢時代の政治の展開と「寛猛相濟」（二）

—— 後漢中・後期、和帝以後 ——

前節で考察した「寛猛相濟」に依拠した章帝の政治姿勢は、以後の皇帝の政治において如何なる展開を呈してゆくのであろうか。卷四、孝和孝殤帝紀により、和帝の詔を見てみよう。

有司不念寛和、而競為苛刻、覆案不急、以妨民事。

（永元六年（九四）三月丙寅）

深惟庶事、五教在寛。

（永元七年（九五）四月）

とあり、有司が「苛刻」を競い「寛和」を思わないことを批判し、「五教在寛」ということからすると、「寛」政が受け継がれているようである。¹⁵しかし、一方では、

今新蒙赦令、且復申勅、後有犯者、顯明其罰。在位不以選舉為憂、督察不以発寛為負、非独州郡也。是以庶官多非其人。下民被姦邪之傷、由法不行故也。

（永元五年（九三）三月戊子）

頃者貴戚近親、百僚師尹、莫肯率從、有司不舉、怠放日甚。……其在位犯者、当先舉正。

（永元十一年（九九）七月辛卯）

方察煩苛之吏、顯明其罰。

（永元十六年（一〇四）七月）

とあり、選挙の名実不一致を批判し、赦令を受けてもなお、再び犯す者があれば処罰を明らかにすべきこと、法令に従わない者を位に在る者から取り締まること、「煩苛之吏」を排除すべきことをいうのによれば、「猛」政（吏治）をも行なっているようである。¹⁶すなわち、和帝期においては、章帝の政治姿勢が受け継がれているのである。

ところが、和帝の死後、「寛」政だけが強調される。¹⁷殤帝の延平元年（一〇六）五月辛卯、臨朝称制する鄧太后は、大赦に際して次の詔を下している。

皇帝幼冲、承統鴻業、朕且權佐助聴政、兢兢寅畏、不知所濟。深惟至治之本、道化在前、刑罰在後。將稽中和、広施慶恵、与吏民更始。其大赦天下。

（卷四、孝和孝殤帝紀）

鄧太后は「深惟至治之本、道化在前、刑罰在後」との視点から大赦を行なうようにいうが、これ以後、大赦は頻繁に行なわれるようになる。大赦の数を調べると、章帝は在位十三年で三度、和帝は在位十七年で五度である。これに比して、殤帝が在位八ヶ月で一度、安帝が在位十九年で十度、少帝（北郷公）が在位七ヶ月で一度、順帝が在位十九年で八度、質帝が在位一年で二度、桓帝が在位二十一年で十四度、靈帝が在位二十二年で二十度、弘農王（皇子辯）が在位五ヶ月で二度、献帝が在位三十年で十一度であり、殤帝

以後、如何に大赦が増加しているかが理解される。

また卷五十一、橋玄伝には、

初自安帝以後、法禁稍弛、京師劫質、不避豪貴、自是遂絶。

とあり、安帝期頃から「法禁」が弛緩してくるといふ¹⁵。こうした事實は、本もと法令が緩やかな上、犯罪により獄に繋かれたとしても、大赦により即放免されるということ、すなわち、罪を犯したとしても事実上ほぼ処罰されないということを示す。言い換えれば、官僚や人民が法令を憚らず私利私欲を恣にし得る風俗を形成する結果を招くものであらう。

それにも拘わらず、「寛」政は推進されるようである。卷五、孝安帝紀、元初二年（一一五）十月、郡国及び中都官に下された安帝の詔には、

其吏人聚為盜賊、有悔過者、除其罪。

とある。盜賊をなす「吏人」に対して過ちを悔いさえすれば処罰しない、とするのは法令も刑罰も無いに等しいことを示すであらう。また、卷六、孝順孝冲孝質帝紀、永建四年（一二九）正月丙寅、順帝の恩赦に際しての詔には、

務崇寛和、敬順時令、遵典去苛、以称朕意。

とあり、務めて「寛和」な政治を尊重すべくいう。そして、同右、永憲元年（一四五）五月甲午の質帝の詔で、旱害の

原因を、

将二千石令長不崇寛和、暴刻之為乎。

と二千石・令長が「寛和」を尊重せず「暴刻」な政治を行なっていることに帰し、更に、本初元年（一四六）正月丙申の詔で、

頃者、州郡輕慢憲防、競逞殘暴、造設科条、陷入無罪。と、州郡の官僚が「殘暴」に競つているとしながらも、

其勅有司、罪非殊死、且勿案驗、以崇在寛。

といい、これを排除するのではなく、「寛」政を尊重するようというのみである。

順帝期から桓帝期にかけて、齊相・司隸校尉・漁陽太守を歴任し、「嚴明」と称された王暢が、南陽太守となるとその政治を「寛」政に転換した事例は、当時の「寛」政尊重の風潮を窺うに足るものである。南陽太守を拝した王暢は、南陽の貴戚の不法行為を深く疾み、任に就くとその摘発に務めた。彼等が恩赦により放免されても、王暢は更に法令を設けて厳しく対処したため、豪族は大いに振恐したのである。しかし、こうした王暢の政治に対して、功曹の張敞なる人物が次のような諫奏を行なった。

五教在寛、著之經典。湯去三面、八方帰仁、武王入殷、先去炮格之刑。高祖鑑秦、唯定三章之法、孝文皇帝感一綈綈、蠲除肉刑。……愚以為懇懇用刑、不如行恩、華

華求姦、未若礼賢。……化人在德、不在用刑。

王暢はこの張敞の諫言を深く納れて「寛政」を行なうようになったのである（卷五十六、王龔伝附王暢伝）。

以上のような、大赦の頻発・法令の弛緩・「寛」政尊重の風潮は、当然のように王朝支配を揺るがすものだったであろう。そこで、こうした状況を是正しようとする主張が登場してくるのは見易いことだが、そうした主張にも「寛猛相濟」に依拠する発言が見受けられるのである。

卷四十六、陳寵列伝附陳忠伝によれば、陳忠は安帝即位以来の「百姓流亡し、盜賊並び起るも、郡県吏も相飾匿し、肯て糾発する莫し」という現状を憂え、次のような上疏を行なっている。

……臣竊見、元年以来、盜賊連発、攻亭劫掠、多所傷殺。……而頃者以来、莫以為憂。州郡督録怠慢、長吏防禦不肅、皆欲採獲虛名、諱以盜賊為負。雖有發覺、不務清澄、至有逞威濫怒、無辜僵仆。……陵遲之漸、遂且成俗。寇攘誅咎、皆由於此。……自今強盜為上官若它郡県所糾覺、一発、部吏皆正法、尉貶秩一等、令長三月奉贖罪、二発、尉免官、令長貶秩一等、三発以上、令長免官。便可撰立科条、処為詔文、切勅刺史、嚴加糾罰。冀以猛濟寛、驚懼姦惡。

先ず陳忠は、盜賊が横行し人民を殺傷するにも拘わらず、州

郡の官僚は虚名を獲得ことに汲々として全く察挙しない現状を掲げ、かかる官僚の怠慢が盜賊蜂起の根本的原因であるととする。それ故、処罰を明らかにすること、すなわち、法令・刑罰を重視することにより官僚に盜賊を察挙させるべく主張する。そして、「冀以猛濟寛、驚懼姦惡」ということからすると、現状は「寛」政が生じた弊害であるから、法令・刑罰を重視した「猛」政によりこれを救済すべきだといふものと思われる。

陳忠のように、法令・刑罰を重視する立場は、順帝期の虞詡にも見受けられる。永建元年（一二六）、虞詡は陳禪に代わり司隸校尉となるが、数ヶ月の間に数人を摘発し、百官より「苛刻」と号された人物である。司空の陶敦等は「盛夏に多く無辜を拘繫し、吏人の患と為る」との劾奏を行なったが、虞詡は上書して次のようにいう。

法禁者俗之堤防、刑罰者人之銜轡。今州曰任郡、郡曰任県、更相委遠、百姓怨窮、以苟容為賢、尽節為愚。臣所發舉、臧罪非一、二府恐為臣所奏、遂加誣罪。臣將從史魚死、即以尸諫耳。

順帝はこれを見、陶敦を罷免した、という（卷五十八、虞詡伝）。「法禁者俗之堤防、刑罰者人之銜轡」といい、虞詡は法令・刑罰を極めて重視している。しかし、本来、法令・刑罰を奉じるべき官僚から互いに責任を転嫁しあう状況

だったのである。かかる状況はやはり陳忠と同様、「寛」政の生じた弊害と考えられるであろう。虞詡においては、はっきりとした形で「猛」政を行なうべきとする主張は見られないが、法令・賞罰を重視する立場は陳忠と軌を一にするものである。

陳忠や虞詡に見られるこうした主張は、「寛」政が生じた弊害、すなわち、官僚の腐敗を、法令・刑罰を重視する「猛」政により是正しようとするものだと考えられよう。

以上を要するに、章帝・和帝期には、「寛猛相濟」という論理に依拠して「寛」政と「猛」政（吏治）とが併用された。以後、「寛」政のみが尊重され、結果としてその弊害が現れると、またこの論理に依拠して、これを救済すべく「猛」政を行なうことが要請されていた。このことからすると、『左氏伝』の「寛猛相濟」という論理は、後漢期の政治の展開と密接に関係するものと考えられる。すなわち、現状に即して如何なる政治を行なうべきであるのかという問題に對して、この論理はあるべきあり方を提示すると同時に、かかる主張をなす立場を正当化する思想的根拠を与えるものだったのである。

結び

前漢期、武帝による儒学の尊重以降、現実において法術を駆使する一方これを儒学で覆う、所謂王霸雜糅の路線が取られてきた。『穀梁伝』は、国家規範を家族道德から分離して道德を法に下屬させるもので、宣帝末の甘露三年（前五一）開催の石渠閣論議における『春秋穀梁伝』の官学化によつて、漢家の王霸雜糅は儒学の中に転化される、という見解がある。だが、管見の限り、政治の場で儒学の立場から、法令・刑罰を主とする立場を是認する発言を見出すことはできないようである。また、宣帝の死後、『穀梁伝』に代わり『左氏伝』が擡頭してくるが、これを準備したのは、宣帝期以後、酷吏に代わり増加した循吏・良吏という儒術の官僚の法律・刑罰の重視であつた、という見解がある。しかし、『左氏伝』が擡頭してくる状況の中でも「寛猛相濟」の引用やこれに依拠する発言は見出すことはできない。

以上のことからすると、後漢における『左氏伝』に見える「寛猛相濟」の論理に依拠する立場は前漢とは異なるもののようである。後漢においては、「寛」政のみならず、法令・賞罰を主とした「猛」政を行なう立場までもが、儒教の經典たる『左氏伝』のこの論理によつて正当化されてい

るのである。

後漢期において、学官に立てられたのは今文系の十四博士であつた（卷七十九上、儒林列伝）。前漢宣帝により立てられた『穀梁伝』、劉歆の表章により立てられた『左氏伝』は在野の学となつたのである。建武年間、尚書令の韓歆、陳元等の運動により、『左氏伝』は一時官学となるが、反対議論も多く、左氏博士李封の死後廃されて、再び立てられることはなかつた（卷七十九下、儒林列伝下）。

しかし、第二節で見たように、章帝期には、『左氏伝』は尊重され、二度に涉り儒生に学習させる等、官学に進じる処遇が与えられたのである。光武帝期から章帝期にかけて、政治・行政の場における『春秋』三伝の引用数は、『左氏伝』が『公羊伝』『穀梁伝』とほぼ同等であるとの調査があるが、卷三十六、賈逵伝に、建初八年（八三）、『左氏伝』等四經の、儒生への教授に対して「此れより四經遂に世に行なはる」ということによれば、章帝の措置以後、更に『左氏伝』が広く学習されたであろうことは想像に難くない。

こうしたことからすると、王符や崔寔の「法治」を主張する立場は、儒家と法家の混在ではなく、儒教の枠組みの中で捉えるべきものである。彼等の立場は、章帝による『左氏伝』の尊重、とりわけ「寛猛相濟」という論理に依拠した「寛」政・「猛」政併用の確立を契機として、儒教という

名の下に肯定されたのである。後漢における儒と法とは『左氏伝』のこの論理により儒教に依拠するものと考えられていたと言えよう。

尚、王符や崔寔の思想と『左氏伝』との関係、何故章帝が『左氏伝』を尊重したのか等、考察すべき問題はなお多い。これらについては今後の課題としたい。

注

- (1) 『潜夫論』の成立については、中嶋隆蔵「王符の天人論について——後漢時代における天人論の展開——」（『文化』三三—二、一九六九年、所収）、王歩貴「王符思想研究」（甘肃人民出版社、一九八七年）、劉文起「王符〈潜夫論〉所反映之東漢情勢」（文史哲出版社、一九九六年）を参照。また「政論」の成立については、串田久治「崔寔『政論』について」（『愛媛大学法文学部論集（文学科篇）』十五、一九八二年、所収）を参照。

- (2) 金谷治氏は、法術主義を強調する一方、儒教的徳化主義こそ正統なものと考えている彼等の主張は、権宜主義の所産であり不安定なはかないものであった、という（『後漢末の思想家たち——特に王符と仲長統——』、『福井博士頌寿記念東洋文化論集』早稲田大学出版部、一九六九年、金谷治『中国思想論集上巻』中国古代理の自然観と人間観』平河出版社、一九九七年、所収）。

(3) 例えば、日原利国氏は、彼は現状を乱国と見て法刑・賞罰を重視するが、道徳・教化こそが理想的政治形態だと結論する、という(『王符の法思想』、『東洋の文化と社会』六一九五七年、『漢代思想の研究』研文出版 一九八六年、所収)。これに対して堀池信夫氏は、彼は觀念的には儒の法への優越を認めるところはあがあるが、その法重視の意義は、法の位置をほとんど儒と対等にまで高めたことである、という(『王符の天道・人道観』、『漢魏思想史研究』明治書院 一九八八年、第三章第三節四)。また辺土名朝邦氏は、彼が徳治を理想とし法治を原理的に一段低く価値づける一方で、現実的には法治の実効性を強調するのは、彼の理想と現実の二元的捉え方である、という(『王符の政治思想の側面——徳治と法治の問題——』、『町田三郎教授退休記念中国思想史論叢』上巻 中国書店 一九九五年、所収)。他方、法と民との關係に着目した田中麻紗巳氏は、彼には、民の大部分を良民と見て道徳・教化で応じるとする考え方と、これを小人と見て法・賞罰で応じるとする考え方と、異なる民の理解に立った異なる考えがあり、前者は理想的な治世と関連して願望から出たもの、後者は当時の民の実像が反映した現実的な対応策で、両者は併存していて彼は矛盾とは考えなかった、という(『潜夫論』における法と民、『日本大学文学部人文科学研究所研究紀要』第五三三号 一九九七年、所収)。尚、過目した限り、この問題について言及するものには他に、矢羽野隆夫「王符の政治思想における〈智〉」(『中国研究集刊』一〇 一九九一年、所収)がある。

(4) 『潜夫論』からの引用は王繼培「潜夫論王氏箋」(『湖海樓叢書』所収)による。また彭鐸「潜夫論箋校正」(中華書局一九八五年)を参照した。尚、これにより本文を改めた場合があるが注記しない。

(5) 崔寔「政論」からの引用は、『後漢書』、『群書治要』(宮内庁書陵部蔵『群書治要』古典研究会叢書 漢籍之部 第十五卷『群書治要』七 汲古書院 一九九一年)、『全後漢文』(嚴可均『全上古三代秦漢三國六朝文』中文出版社 一九八一年)による。尚、『群書治要』からの引用において、『全後漢文』を参照して字句を改めた部分があるが注記しない。

(6) 注(2) 所掲金谷氏論考を参照。

(7) 『後漢書』の資料的問題は度々指摘されるところである。小論では、范曄により手が加えられた可能性が比較的低いと思われる上奏文等の資料を中心として用いる。それ以外の部分については、吳樹平校注『東觀漢記校注』上・下(中州古籍出版社 一九八五年)、周天游輯注『八家後漢書輯注』上・下(上海古籍出版社 一九八六年)、袁宏撰・周天游校注『後漢紀校注』(天津古籍出版社 一九八七年)と対照し可能な限り確認される資料を用いた。

(8) 東晋次「光武帝・明帝の政治」(『後漢時代の政治と社会』名古屋大学出版会 一九九五年、第一章第一節)は、光武帝・明帝の統治理念について「諸功臣・外戚への権力集中を抑制しながら、文吏的官僚を駆使して法による皇帝一元支配の樹立を図った」ものとされる。

(9) 『後漢紀』ではこの陳寵の上疏を建初五年(八〇)のこと

とする。

(10) 『後漢紀』ではこの第五倫の上疏を建初四年（七九）のこととする。

(11) 日原利国『白虎通義』研究緒論——とくに礼制を中心として——（『日本中国学会報』一四 一九六二年、前掲日原氏著書、所収）、同氏『白虎観論議の思想的位位置づけ』（『漢魏文化』六 一九六七年、同右著書、所収）を参照。

(12) 吏治には触れないが、光武帝・明帝の皇帝一元支配の理念を章帝が受け継いでいることは、東晋次章帝の政治と儒教理念（『前掲東氏著書、第一章第二節』）が指摘している。

(13) 李賢注に『東観漢記曰、去年伏誅者、刺史一人、太守三人、減死罪二人、凡六人』という。

(14) 吏治の直接の担い手である文吏的官僚としては酷吏が考えられるが、章帝期の酷吏には周紆がいる。周紆は（『章帝紀』）と記されるように、貴戚をも憚らないその政治姿勢を章帝から評価されている。しかし、その厳切さが度々有司により効奏され、建初八年（八三）に罷免されるが、章帝在位中、御史中丞に復職している（同右）。周紆のこうした政治姿勢は、章帝が排除した腐敗した官僚と対極をなすものである。そして、彼に対する章帝の評価からは、章帝の吏治に対する姿勢の一端が窺われる。

(15) 『東観漢記』卷二、穆宗孝和帝の条にも「德教在寛、仁恕並治」という。

(16) 和帝期には、酷吏周紆、また循吏に列されながらもその政

治は酷吏を思わせるものがある王渙といった存在がある。卷七十六、循吏 王渙伝に「為太守陳寵功曹、当職割断、不避豪右。……州举茂才、除温令。累多姦猾、積為人患。（王）渙以方略討撃、悉誅之。……遷兗州刺史、繩正部郡、風威大行。……永元十五年、……為洛陽令。以平正居身、得寛猛之宜。其冤嫌久訟、歴政所不断、法理所難平者、莫不由尽情詐、匡塞群疑。又能以誦数笺劾姦伏」という。

(17) 後漢時代において「寛」政が推進されてゆくことについては、社会史的観点から渡邊義浩『徳治』から「寛治」へ（『中国史における教と国家』雄山閣出版 一九九四年）、『後漢國家の支配と儒教』雄山閣出版 一九九五年、所収に指摘がある。氏は、先ず後漢における循吏・循吏的官僚の考察から、その特徴を、「寛仁」を以て属吏・人民に臨む——具体的には過失・訴訟に刑罰を用いない——支配とし、これを「寛治」と称する。そして章帝の詔等に引かれる『尚書』堯典（現舜典）の「五教在寛」をキーワードとして、「寛治」は章帝期に成立し、章帝・和帝期に推進されたとする。また「寛治」が推進された因由について、（一）「寛仁」が主張され、刑罰では緩刑論が主流であった後漢時代の儒教の影響、（二）光武帝・明帝の「吏治」は豪族を排除するものであり後漢では実現し難く、豪族の在地社会に有する規制力を取り込み且つ積極的に利用する「寛治」へと移行せざるを得なかったこと、の二点を挙げる。筆者は氏のいう「寛治」を「寛」政と同様のものと見做すのだが、「寛治」の成立には、小論で検討する「寛猛相濟」という論理も深く関わるものと考え

る。尚、「寛治」が推進された理由については、思想的な面からも考察の余地があると思われるが、検討は今後に譲りたい。

- (18) 本田濟「東漢の名節」(『東洋の文化と社会』二 一九五二年、『東洋思想研究』創文社 一九八七年、所収)は、後漢時代に主流であった緩刑論について「緩刑が唱えられるというのは事実法が峻しいことである」とし、この記載から「法の弛みは安帝あたりから顕著になつて来る」という。

- (19) 注(11) 所掲日原氏論考を参照。

- (20) 町田三郎「漢宣期の儒教」(『中国哲学論集』一 一九七五年、所収)。

- (21) 富谷至「西漢後半期の政治と春秋学——『左氏春秋』と『公羊春秋』の対立と展開——」(『東洋史研究』三六—四一九七八年、所収)。

- (22) 管見の限りでは、『史記』『漢書』及び「前漢文」(嚴可均『全上古三代秦漢三國六朝文』)において、『左氏伝』の「寛猛相濟」の引用やこれに依拠する発言を見出すことができない。

- (23) 田中麻紗巳「後漢初期の春秋学について」(『中村璋八博士古稀記念東洋学論集』汲古書院 一九九六年、所収)。